

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

カムパネルラ

Vol.25 2011年11月号

- 子ども世界への誘い センダック『かいじゅうたちのいるところ』・・・佐藤 哲也
- きつねの悲しみ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 授業で利用すると有効な1冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・浦邊 盛勝
- 「ひみつの部屋」を見つけるときめきを教えてくれるこの一冊・・・・・・・・鈴木 桃子
- 新刊紹介・・藤田 博

子ども世界への誘い センダック『かいじゅうたちのいるところ』

佐藤 哲也

この絵本の作者はアメリカの作家モーリス・センダックです（原題： *Where the Wild Things Are*）。1963年に出版されて以来、世界中で2000万冊以上売れているそうです。民俗学者や精神分析学者も注目する作品です。昨年、ワーナーブラザーズによって映画化されました。日本では、児童文学研究の碩学、神宮輝夫氏の翻訳が有名です（100万部を超えるベストセラーになっています）。



本書は2、3分もあれば読了できるので、「ちょっと子どもに読んであげようかな」と、仕事、家事、育児に疲れたお父さんやお母さんでも気軽に手に取ることができます。絵本の読み聞かせに不熱心（むしろ批判的!?）であった私でも、2～3回、我が家の子どもたちに読んでやった記憶があります。

主人公マックスは、現実の世界から「異界」におもむき、再び現実世界に舞い戻ります。「おかあさん」に叱られて「しんしつ」に閉じ込められてしまうマックス。すると「によきりによきりと」木が生えて、波が「ざぶりざぶり」と打ち寄せます。彼は1年と1日（意味深なタイム・スパンですね）航海して、「かいじゅうたちのいるところ」にたどり着きます。そこでマックスは「かいじゅうたちの おうさま」になります。「かいじゅうたち」を従えて、彼自身の「かいじゅう性」が解放されます。母親からたしなめられることなく、時間を気にかけることもなく、マックスは遊びに熱中していきます。「子どもは絵を読む」といわれます。見開き3ページ分、文字や余白が消えて画面いっぱいに展開するこの場面に、「ここが一番好き！」という子どもがたくさんいると聞いています。マックスと同調するかのように、子どもたちも言葉も忘れて、絵本の世界、遊びの世界に没入していくのでしょうか。

「かいじゅうたち」といっしょに過ごしていたマックス。やがて「やさしい だれかさんのところ」に帰りたくなります。おまけにお腹も空いてきます。彼は「かいじゅうたちの おうさま」をやめることにします。しかし、かいじゅうたちは「おねがい、いけないで。おれたちは たべちゃいたいほど おまえが すきなんだ。たべてやるからいけないで。」と凄みます。さて、いったいマックスはどうなるのでしょうか？

この物語は、主人公マックスの視点から一貫して描かれています。彼の感情の移り変わりとともに、ストーリーが展開していきます。ふざけて、怒って、不安で、怖くて、楽しんで、さみしくて.....しかし最後には現実世界（寝室）にマックスは帰ってきます。そこはお母さんの愛情が感じ取れる、居心地の良いところ。

幼い子どもたちは、マックスに感情移入をしながら、絵本を楽しんでいるのでしょうか。また、忘れていた「子ども感覚」を呼び覚まされる大人もいることでしょうか。とても不思議な絵本です。

「かいじゅうたちのいるところ」/モーリス・センダック作/神宮輝夫訳/富山房

（幼児教育講座）

きつねを描くと、決してそこにももの悲しさが漂うのは何故でしょうか。母ぎつねと子ぎつねが描かれることによって、もの悲しさはなお一層増していきます。きつねはずるいもの、人を化かすものとの固定観念があります。ずるいとされるそのきつねが、新美南吉の「ごんぎつね」を典型として、ずるさを超えたものを見せる、自己犠牲の精神さえも発揮する、そこに悲しみが生まれるのです。

「どうしたの、おなかがすいたの？ それともどこか いたいの？」と聞く母ぎつねに、「ううん、たださむいだけだよ」と言っていた子ぎつねが死んでしまいます。山のふもとに、日暮れになると、ぽっと明かりの灯る古い電話ボックスがあります。その小さな明かりが、「ほんのすこし きつねのむねをあたため」てくれます。母さんに電話をかけにやって来た男の子、その「おとこのこのうしろで、しっぽがゆらんと ゆれたようなきがした」のです。男の子と母ぎつね、向こう側の世界とこちら側の世界、電話ボックスだからこそ二つは交差し、重なり合うのです。その電話ボックスから明かりが消えます。電話が使えないのです。そうと知れば、男の子はがっかりするに決っています。「ああ、わたしが、でんわボックスのかわりに なれたらいいのに。」「まほうは使えない」と子ぎつねに言っていた母ぎつねが「まほう」を願い、「でんわボックス」に変身します。二つ並んだ電話ボックスの一方、「きつねのでんわボックス」で男の子が電話をします。「かあさん、あのね・・・」、応えるのは母ぎつねです。「きがつくと、きつねはゆめからさめたように、ぼんやりとすわっていました。」そう言いながら、「さめたように」ではない、実際に夢であった手の内が明かされているのです。それによって、子どもを亡くした母ぎつねの切なさが、より強く伝わることになるのです。戸田和代作・たかすかずみ絵『きつねのでんわボックス』（金の星社）の世界です。



「かあさん、さむいよう、おなかが すいたよう。なにか たべたいよう」、森はな作・梶山俊夫絵『ごんごんさまにさしあげそうろう』（PHP研究所）の始まりは、そう訴える子ぎつねです。「そうだ。むらへ おりて、どこかで にわとりを いただいてこよう。」「いけへ 行って おさかなを さがしてみよう」そのいずれもがだめ、困り果てたきつねの耳に太鼓の音が聞こえてきます。「あっ、あれは のせぎょう（野施行）の たいこ。こんやは のせぎょうだったのか。ありがたいこと」母ぎつねは、「むねを ふるわせて、おいなりさまに 手を あわせ」、 「ごんごんさまにさしあげそうろう」のお供え物をいただきます。お稲荷さまとして祀られるきつねがお稲荷さまに手を合わせる、それによって伝わってくるのは、お供え物へと託された感謝の思いなのです。「さあ、いただきなさい。たべていいんだよ。」「おなか いっぱいに なったよ・・・かあさんも おあがりよ」子ぎつねがこう言うところからすれば、食べ物は残っているに違いありません。それでも、母ぎつねがそれを食べるとは思えません。子ぎつねの明日のために残すはずだからです。

新美南吉作・黒井健絵『手ぶくろを買いに』（偕成社）も母ぎつねと子ぎつねの物語です。「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする。」そう言う子ぎつねに手ぶくろを買ってやりたい母ぎつねは、子ぎつねを連れて町へと向かいます。町が近くなると、母さんぎつねの足はすくんでしまいます。家鴨を盗もうとして見つかри、「さんざ追いまくられて、命からがら逃げた」ことが思い出されるからです。母ぎつねは子ぎつねの手の一方を「人間の手」に変えます。ひどい目にあわされたあの人間の手には変えたくない、そうに決っています。それでも手ぶくろをさせてやりたい母の気持ちが勝るのです。二つの白銅貨を「人間の手」の方へ握らせませす。ここでの白銅貨は木の葉であってはならない、そうでなければ母の思いがうそになるからです。帽子屋の光がまぶしく、子ぎつねが出したのは、「決して、こっちのお手々を出しちゃ駄目よ。」ときつく言われていた方の手でした。手ぶくろをした子ぎつねが、「恐ろしいものだ」と聞いていた人間の家をのぞいて見ると、子供の声がします、「こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって啼いてるでしょうね。」楽屋落ち的なこの一言によって、「ほんとうに人間はいいものかしら。」と繰り返す母ぎつねのつぶやきの持つ意味合いが増幅されるのです。



「きつねのでんわボックス」戸田和代作／たかすかずみ絵／金の星社

「ごんごんさまにさしあげそうろう」森はな作／梶山俊夫絵／PHP研究所

「手ぶくろを買いに」新美南吉作／黒井健絵／偕成社

この絵本を使って考えられる授業例を、具体的に示していきたいと思います。

中学1年生の地理では、世界の姿を国の名前や面積、形などからとらえさせます。子どもたちはランキングが好きなので、地図帳などの資料を使いながら、面積の上位10位を考えさせると授業が盛り上がります。その流れで世界の人口について取り上げます。今の世界の人口は70億、そのうち中国が13億、インドが12億などアジア州に多いことを紹介するのですが、数字が大きすぎて子どもたちにはイメージがわかりません。そこで、この絵本のように世界の人口を100人として考えさせ、100人のうち「61人がアジア人です 13人がアフリカ人 13人が南北



アメリカ人 12人がヨーロッパ人 あとは南太平洋地域の人です」と話をすると、子どもたちは世界の人口がいかにアジア州に集中しているかをイメージすることができます。その一端をなしているのが人口1億2000万人の日本で、100人中2人が日本人ということも付け加えると、日本人が意外に少ないのも想像させることができます。また、100人のうち「17人は中国語をしゃべり 9人は英語を 8人はヒンドゥー語とウルドゥー語を 6人はスペイン語を 6人はロシア語を 4人はアラビア語をしゃべります これではやく、村人の半分です あとの半分は ベンガル語、ポルトガル語、インドネシア語、日本語、ドイツ語、フランス語などをしゃべ」ることから、これから世界で羽ばたく人間になるには、日本語だけではなく外国語を話せなければならないことや、日本語以外で話ができると世界中にたくさんの友達を作ることができるのを伝えて、外国語を学習する意欲をかき立て、世界に興味を持って

もらうように話をすることも可能です。他に、世界の3大宗教についても取り上げることになりますが、100人のうち「33人がキリスト教 19人がイスラム教 13人がヒンドゥー教 6人が仏教を信じています 5人は、木や石など、すべての自然に靈魂があると信じています 24人は、ほかのさまざまな宗教を 信じているか あるいはなにも信じてい」ないことから、キリスト教信者が多いこと、仏教徒が意外に少ないのを知ることになります。宗教にはそれぞれ決まりがあり、イスラム教では豚肉、ヒンドゥー教では牛肉を食べることができないなどの文化の違いにも触れ、多文化尊重の素地を作ることにつながる展開もできると思います。

中学3年生の公民では、「国際社会と国際平和」の学習をします。日本に住んでいると平和に暮らしていることが当たり前のように感じますが、世界には平和でない国がたくさんあります。100人のうち空爆やテロの襲撃、地雷による殺戮などにおびえている人は20人もおり、自国から逃れている難民も1~2人いるのを紹介することで、自分たちがいかに恵まれた環境で生活しているのかを知りましょう。争いが絶えないそういった国々では、その紛争が原因で貧困問題が深刻であることを取り上げる際にも、100人のうち字が読めない人が14人いること、「20人は栄養がじゅうぶんではなく 1人は死にそうなほどで」あることを話し、世界には勉強したくても貧しいために働くのを余儀なくされている子どもたちが多くいること（兵士となって銃を撃つ子どもたちもいる）も併せて紹介すれば、毎日、ノートや鉛筆を持って学校で授業を受けているのがとても恵まれていることが分かるでしょう。また、今回の東日本大震災では自然の恐ろしさや命の尊さ、人々の優しさを改めて知っただけでなく、電気や水道、ガスのない生活を送って不便な生活を体験した子どもたちも多くいたことと思います。そういう経験をした子どもたちに対し、世界には100人のうち、きれいで安全な水を飲めない人が17人もいることを紹介すれば、便利な世の中に慣れないように、これから意識して生活をしていこうとする子どもたちが増えてくるかもしれません。さらに、震災で原子力発電所の放射能漏れの多大なる影響を受けたエネルギー分野に関しても、世界のエネルギー問題を取り上げる際に、「すべてのエネルギーのうち 20人が80%を使い 80人が20%を分けあってい」る事実を話すと、エネルギーは世界の国々の人たちがすべてが享受しているのではなく、一部の人たちが多く使用していることが分かります。その一部の人たちの中に我々日本人も含まれていることを紹介すれば、節電などを積極的に行おうとする子どもたちも増えてくるのではないかと思います。

「世界がもし100人の村だったら」池田香代子再話／C. ダグラス・ラミス対訳／マガジンハウス

(附属中学校教諭)

「ひみつの部屋」を見つけるときめきを教えてくれるこの一冊

ジル・バークレム作 / 岸田衿子訳 『のぼらの村のものがたり ひみつのかいだん』(講談社)

鈴木 桃子

私が子どもだった頃、家の前に大きな桜の木がありました。春にはとてもきれいな花を咲かせるのですが、夏には嫌いな虫が顔を出し、近づくことができませんでした。



『のぼらの村のものがたり ひみつのかいだん』は森の中で暮らすねずみたちの話です。ページを開くたびに、こぼれんばかりの装飾や色とりどりの小物が目に飛び込んできます。

「ふたりとも、今夜の用意はできてるかい？」もりねずみだんしゃくがききました。プリムローズとウィルフレッドは、めくばせしました。今夜、暗くなってから、ねずみたちがみんな、まっかにもえる火のまわりにあつまって、むかしながらの冬至まつりをいわうのです。

二人は詩を暗唱することになりました。練習する場所を探し、衣装を探し、住んでいる木の家の、部屋から部屋を回ります。二人は物置部屋の隅のカーテンの裏にある扉を見つけます。偶然見つけた鍵で扉を開けると、長い螺旋階段が上へと続いていました。「もう、何年も何年も、この階段をのぼったひとがいないんだわ」、そう言いながら二人が上ったその先に、長いこと使われていない豪華な部屋があったのです。

部屋につながる「子ども部屋」で見つけたきらびやかな衣装、その衣装を身にまとっての詩の暗唱は大成功。みんな拍手喝采です。お父さんもお母さんも大喜び。階段を上るとき、二人にはなぜかいいことが起こりそうな予感がしていたのです。それも、この階段が上へとつながっていたからのこと、下へと降りるものであったら、うまくいかなかったのではないのでしょうか。明日はあの「ひみつの部屋」で何をして遊ぼうか、そう考えるうちに、疲れた二人はすやすやと眠ってしまいました。

私が初めてこの本を手にした時、話の内容はよくわかっていなかったのだと思います。しかし、ねずみの使っているコップはどれだけ小さいだろう、ねずみもねずみの世界では服を着るのねと、胸をときめかせたことを覚えています。その後、桜の木に近づき、手を触れてみたのは、この木の中にもしかしたらとの思いがあったからかもしれません。

(音楽教育専攻4年)

新刊紹介

あまんきみこ・文 / こみねゆら・絵 『つきよはうれしい』(文研出版)

学校からの帰り道、ようくとフジの花を見上げていて、バイクにはねられた「わたし」、手術が終わり、意識が戻ると、病室での「パパとママの あおい かが、ふかい あなの そこから みあげたよう とおくに」見えます。ようくんは毎日、見舞いに来てくれます。マダイ、タラ、ボラ、ドンコ、ミノカサゴ・・・、「さかなの えを かいて、まいにち、一まいずつ もって」です。ようくんのお父さんは、水族館の館長なのです。病院にいる2週間で、「フジのはなは、みんな、ちってしまってい」ました。ようくんの魚の一匹一匹が、花びら一枚一枚に置き換わる、それによって足の傷はよくなり、退院できたかに思えるのです。

それでも心の傷は癒えていません。「いえの なかでは、あるけても、がっこうに いくあの みちは、あるけない」、そう言う「わたし」を、ようくんは、毎日、見舞ってくれます。カゴカキダイ、マフグ、アカエイ、イシナギ、ギバチ・・・、「ちがう さかなの えを、一まいずつ もって。」「すいぞくかんって、いっぱい、さかなが いるのね。まだまだ、いる?・・・じゃあ、まだまだ、がっこう、やすめるわ」学校を休む、そう思う「わたし」の中に非日常的時間が広がります。「そうだ、きょうから、つきよなんだ」、ようくんのその言葉には、そこから夢の世界へと入った「わたし」が示されているのです。

「わたし、よなかに、めが さめたの。」「みずいろの カーテン」の向こうから歌声が聞こえてきます。「つきよは うれしい うみの そこ ほうい ほうい」ようくんが窓から外へと「わたし」を連れ出します。「永遠の子ども」ピーターパンとしてのようくんをつくり出し、迎えにきてもらう、それを可能にしているのはイメージのつながりです。「ふかい あなの そこ」「すいそう」「さかなの え」「みずいろの カーテン」、それがフジの花の「いろ」に通じているのは言うまでもありません。「みんな、せまい すいそうから できて、ほんとうに うれしそう。」ようくんが、そして「わたし」が魚と一緒に泳ぎます。「つぎの ばんも。その つぎの ばんも。まいばん、およいで、わたし、ぐっすり ねむったの。」眠ることで「わたし」は、「フジのはな」から解放されたのです。「むねが きゅんとなるほど、がっこうに いくたくなった」のはそのためです。「あの フジのはなのみちも、へいきで とおれた」のです。教室に行くと、ようくんが「つきよの ときのように、てを ふって」笑います。「すこし、あかくなったみたい。」

(藤田 博)

発行:宮城教育大学附属図書館